

記念講演

日本人の宗教意識

横山 滋

(NHK放送文化調査研究所
世論調査部主任研究員)

はじめに

最初にお断りしておかなければなりません。私は宗教の専門家ではございません。世論調査をやってまいりました。今から八年前の昭和五十六年に、「日本人の宗教意識」という調査を実施いたしました。その本をお読みいただいたご縁で、今日ここに伺うことになったわけでございます。註(1)

先日、事務局の方がお見えになりました。素人の目から見た既成の宗教像とか、今、若い人たちの宗教意識は一体どうなっているのか話してもらいたいというご注文でございました。どれだけご期待に添えるかわかりませんが、私なりの考えを申し述べてまいりたいと思います。

お話は大きく三つに分かれます。第一番目は、日本的な宗教の特徴に関するお話になります。二番目は、今、時代が一体どういう方向に向かっているのか。時代の変化の方向についてのお話を申し上げます。三番目に、特に若者たちに絞った場合に、どういう変化が起こっているのか。この三つについてお話をしてまいります。

あらかじめ申し上げておかなければならないのですが、私の話はいくつかの調査のデータをもとにしております。宗教について、まるまる一本の調査をやりましたのは、昭和五十六年十一月の末でございますが、このときに行った「日本人の宗教意識」という調査が一回きりでございます。四十何問の質問を、すべて宗教関係の問題に費やしまして、この手のものとしては非常に珍しいデータになっております。それとは別に、「日本人の意識」という調査註(2)がございます。これは第一回目が昭和四十八年、有名なオイル・ショックの直前に行われました。それから五年ごとに、つまり昭和五十三年、五十八年、六十二年と四回、ほぼ同じ質問で繰り返されております。これは日本人の意識全般、生活目標とか、家庭とか、男女のあり方、仕事や余暇の話等々、生活全般をおおう調査ですが、その中に二問だけ、日常の宗教行動と信仰・信心に関する質問がございます。時代の変化を見るデータとしては主としてこれを使ってまいります。それでは、日本人が信じている宗教とはどういうものなのか、ということから話をしてまいりたいと思います。

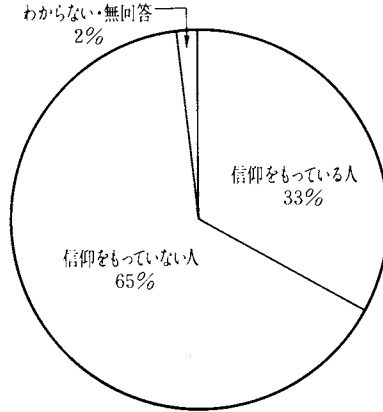
一

日常生活では、よく日本人は無宗教であると言われます。実際に私どもが調査をした結果でも、「あなたは何か宗教を信仰していますか」と聞かれますと、「信仰を持っている」と答える人は少数派でございます。三三％の人がほかの信仰を持っていると答えております。このほかにもいろいろな調査のデータがありますが、ほぼこの三割前後という数字で変わっておりません。それに対して、「信仰を持っていない」という人は六五％であります。つまり、三人に一人は信仰をもっている、残りの二人は持っていないということになります(図1)。

これを、例えばアメリカ人と比べてみますと、アメリカ人は九三％が信仰を持っている、信仰を持っていない人は七％だけであるということですから、我が国の場合と非常に鋭い対比をなしております(図2)。

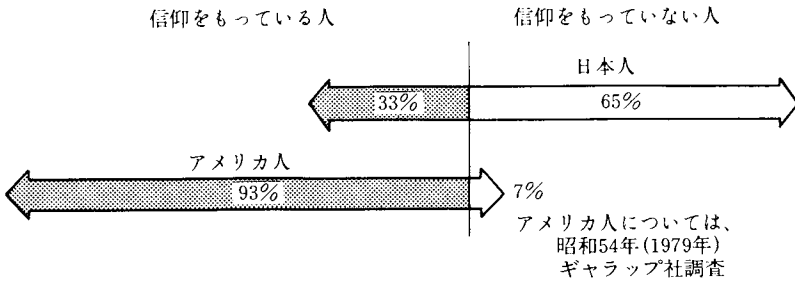
ところが、これとは全然別な数字がありまして、文化庁宗務課の宗教統計によりますと、日本の信者の総数は二億

図一 1 <信仰の有無>



図一 2 <信仰の有無>

—日米の比較—



一千万人ぐらゐになります。これは神道系がざつと九千万人、仏教系が同じく約九千万人ということで、日本の総人口を超えてしまう数になります。

そこで一つ問題なのですが、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』という百科事典がございます。この中で「宗教」という項目を繰ってみましたら、総人口を越えるような信者数があるということを「the curious fact」（奇妙な事実）と呼んでおります。日本の百科事典ではどうかと思ひまして、平凡社の『世界大百科事典』を繰ってみましたところ、ここには「珍現象」と記してございました。私は、ここに一つの大きな問題があるのではないかと思ひます。といいますのは、なぜ一人の人が同時に二つの宗教を信じている、あるいはその信者として登録されているということが「奇妙な事実」であるのか。「珍現象」であるのかという問題です。

このことに対する欧米人の見方と言ってよろしいのかもしれないかもしれませんが、二年ほど前、イギリスのあるテレビ局が、日本を紹介する番組を短期間にたくさん組んだことがあります。その一つに、「ジャパン」というドキュメンタリーがありました。その中で、神棚に手を合わせる若い女性が画面に映っておりまして、こういうナレーションが添えられています。「神道は日本人の生活のあらゆる面に浸透しています。神道の信者であると表明する人は日本人の四％にすぎませんが、神道の儀式や式典は生活のあらゆるところに広がっています。信教の混合は日本人にとって何の問題にもなりませんし、だからこそ彼らは西洋からの新しい概念を日本人としてのアイデンティティーを失うことなくいつも吸収することができるのです。」

つまり、イギリス人から見ると信教の混合が何の問題にもならないというのは、やはり「奇妙な事実」に見えるらしいのです。ところが、よく考えてみますと、これが「奇妙」だというのは一神教文化圏だけに通じる話ではないかと思われれます。つまり、一つの宗教を信じることは、他の宗教を否定することだという前提の上に立ってみて、初めてこれが「奇妙な事実」になる。その見方を我々日本人が何の疑問も持たずに受け入れてしまっているのは問題では

ないでしょうか。

既にたくさんの方々が指摘をされていることですが、日本の宗教というのは、多神教的というか、もしくは汎神論的なものです。神様、仏様がたくさんいたり、一木一草すべてに神が宿るといような文化ですから、そこに置いてみると、これは「奇妙な事実」でもなければ「珍現象」でもないということになると思います。

本当に日本人の心を理解しようとするなら、日本の宗教を、そういうものとして、もう一回しっかりとりえ直す作業が残っているのではないか——これが、今から八年ほど前、「日本人の宗教意識」の世論調査を実施するに当たって、私が基本に置いた考え方でございます。その気持ちは、今でも変わっておりません。

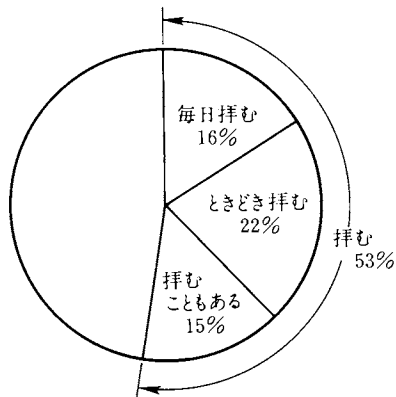
つまり、私が申し上げたいのは、「宗教」という言葉が例えば、英語で religion という言葉の翻訳としてしかとらえられていない。— 神教的な意味での宗教というのを religion という言葉であらわすとすれば、その概念がすっかりそのまま我が国に持ち込まれて、そこから日本の宗教が見られてきた。今でも見られていると思います。そうではなくて、そこにもっと広いというのでしょうか、さまざまな神々の共存を認めるという意味での新しい宗教という見方ができなければならないのだと思います。

今のような視座に立って日本の宗教をもう一回眺めてみたいと思います。

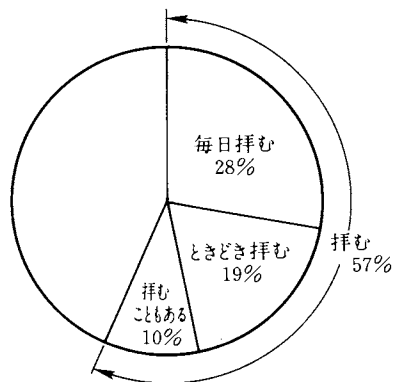
さっきの数字を思い出していただきましたのですが、「何か宗教を信仰している」と言った人は三三%おりました。日本人全体の三分の一でございました。ところが、「神棚を拝むことがあるか」と尋ねますと、「毎日拝む」という人が一六%、「時々拝む」という人が二%おられます。これを足し合わせただけで、既に三八%であります。「何らかの宗教を信仰している」という人の割合を超えております。そのほかに、「拝むこともある」という人が一五%おりまして、これらを全部合わせると、およそ神棚を拝むことがあるという人は五三%、半数をちょっと超えるぐらいの割合になっております（図—3）。

同様に「仏壇を拝むか」という質問をしてみますと、「毎日拝む」という人が二八%、「時々拝む」という人が一九%、「拝むこともある」という人が一〇%であります。これは「毎日拝む」という人の割合で見ましても、神棚の場合より八%多くなっておりまして、およそ「仏壇を拝むことがある」人全体の割合で見ても、仏壇は五七%と、神棚の場合よりさらに多くの人が実際に仏壇を拝むという行動をしております(図一四)。

図一三 <神棚を拝むか>



図一四 <仏壇を拝むか>



それから、正月の初詣ですが、これを「よくする」もしくは「することがある」という人は八一%でございます(図-5)。
 「よくする」という人だけで六九%、七割に達しております。さらに「することがある」という人が二〇%おりますので、合計しますと八九%、九割の人がお盆やお彼岸にはお墓参りをするということです(図-7)。つまり、自分は信仰は持っていないと言う人の中に、実際、神棚や仏壇を拝んだり、初詣をしたりという行動が見られるわけです。こういう実際の行動の中に潜んでいるもの、それが日本人の宗教なのではないかというふうに見られるわけです。

図-5 <初詣で>

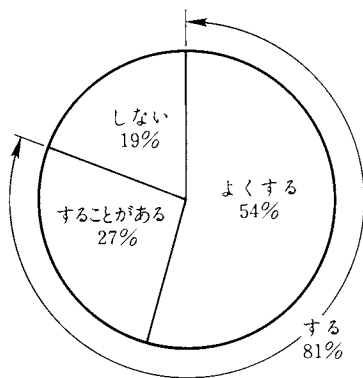
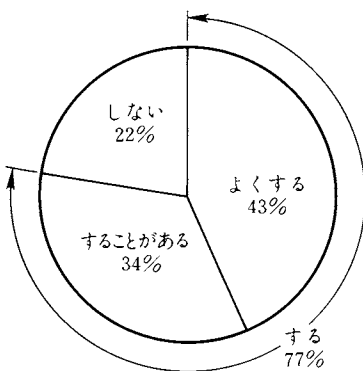


図-6 <お守りやおふだをもらう>



注
 数字は、小数点以下を四捨五入しているため、総計が100%にならない場合がある。

図-7 <お盆やお彼岸の墓参り>

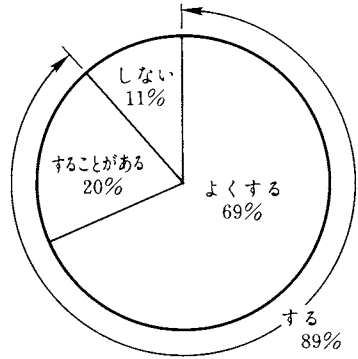
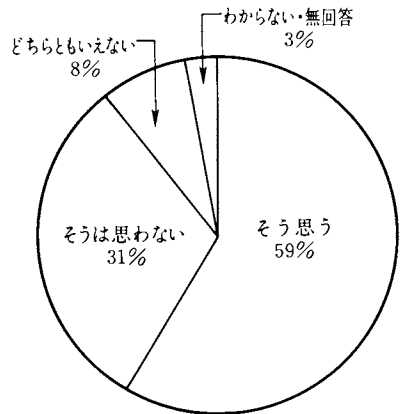


図-8 <祖先との心のつながり>

「祖先の人たちとは、深い心のつながりを感じる」

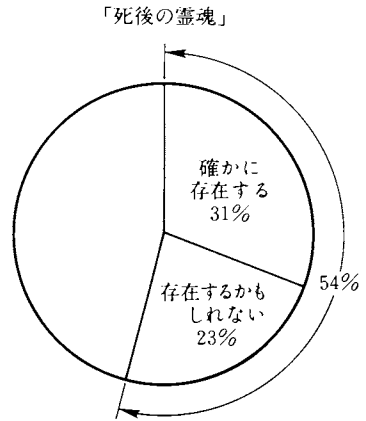


それから、そういう具体的な行動だけではなく、ある種の感覚も多くの人たちが共有しております。例えば、「祖先の人たちとは深い心のつながりを感じる」という人が六割ほどおります(図-8)。「死後の靈魂は確かに存在する」あるいは「存在するかもしれない」と感じている人が五四%おります(図-9)。

つまり、欧米的な、と申し上げてよろしいでしょうか、そういう宗教の概念を我々は持っているわけですが、そういう概念からすると、宗教ではないと見られるものの中に、今ご紹介してきたような、日本人のさまざまな宗教的行動、もしくは宗教的感覚がかなり含まれていることになります。

それでは一体、日本人の宗教をどのようにとらえ直したらいいのでしょうか。柳田国男あたりからの一つの流れがあると思いますけれども、慶応大学の宮家準^{みやけのりとし}さんは、この点について「民俗宗教」という概念を提起して、次のように述べておられます。

図—9 <存在すると思うもの>



「年中行事、通過儀礼、俗信などを中心としたこうした宗教を、私は民俗宗教と名付けている。生活上の必要から、自然発生的に成立した民俗宗教は、教祖をもたぬわけであるから教説はない。むしろ儀礼が中心で、伝説や神話がそれを説明する形態をとっている。その組織基盤は家、親族、地域社会、民族などの既存の社会組織である。それ故、普遍宗教のように第三者にその教えを広めることはさして必要とはされていない。しかし、その儀礼、伝説、神話などを自分たちの子や孫に伝えることが強く求められている。」^{註(3)}

ポイントには幾つかありまして、一つは、具体的な教祖はないということです。例えば、キリスト教がキリストという教祖を持っているのとは大いに違っております。それから、教えの自身がはっきりしていない。これも、キリスト教が聖書を持っていて、その解釈をめぐっていろいろな研究が行われているのに比べてみますと、日本的な宗教というのは、そういうものを持たない。それから、教団——宗教的組織が、キリスト教の場合には教会としては

きりしたものがあつたわけですから、日本的な宗教においては、あるいは民俗宗教においては、家、親族、地域社会というごく普通の既存の社会組織と重なっている。こういう違いがあります。

繰り返しになりますが、我々は、間違えて、教祖とか、教説とか、教団のあるものだけを宗教だと思ひ込んで来たのではないのでしょうか。ですから、そういうものだけを宗教と考えますと、我々には宗教はないということになってしまいます。実際、私などもそういう意味での宗教というのを持っておりません。けれども、宮家さんが述べておられるような民俗宗教という形でとらえ直してみると、墓参りに行ったり、初詣に行ったりするのも宗教的な行動だということができます。どちらの見方が日本人の現実をよくとらえているのでしょうか。

日本の宗教というのは、こういう、いわば多神教的あるいは汎神論的なのですから、一神教的な風土から見ると、およそ想像もつかないぐらい宗教に関してルースなどころがあります。何でもかんでも取り入れてしまふということころがあつて、それは先ほどご紹介したイギリスのテレビ放送が伝えたとおりです。しかし、一点だけ、この日本的な宗教が非寛容性を示すところがありまして、多神教的、汎神論的なもの否定、つまり、自分は正しいから、おまえたちは間違つてゐるという言い方をされると、非常にアグレッシブ（攻撃的）に抵抗を示すということが言えるのではないかと思ひます。

適当かどうかわかりませんが、最近気がついた問題を幾つか拾つてみますと、去年の六月でしたか、山口の自衛官合祀問題についての判決がございました。あれはいろいろな見方ができると思ひますが、私は、ちょっと変な話だと思つてゐるのです。宗教の自由は我が国の憲法でも認められております。宗教の自由というのが必要なのは、ある宗教を信じてゐることが、他の宗教を否定するような風土、状況で初めて必要になるもので、そうでない宗教同士であるならば、そもそも宗教の自由をうたふ必要がないのではないかと、個人的には思つております。つまり、そこに合祀されるのは、一神教的な尺度で自分の信仰に対する侵害だということが成立するのでしょうか。そもそも宗教の自由とい

う、一神教的な風土の中から生まれたもの、その風土の中では必要なものが、多神教的、あるいは汎神論的な土壌で同じように必要であるのかどうかというのは、考えてみたほうがよろしいのではないかと思います。これは私の個人的な考えです。

ともあれ、あの問題があれだけ反響を呼び、人の関心を引いたのは、一つには一神教的な立場から日本人の宗教心に対する挑戦のようなニュアンスを人々が感じ取ったからではないかと、私は見ております。ですから、自分は正しい、だから、おまえたちは間違っているというようなものに対しては、かなり日本人は抵抗を示すと見てよろしいのだと思います。

もう一点、つい最近もあつたと思いますけれども、ものみの塔、エホバの証人の信者がけがをした子供に対する輸血を拒否して、子供を死なせた——という言い方が適当なのかどうかわかりませんが——というような事件が何度かマスコミをにぎわしております。あれも一神教的な論理を徹底的に実行することに対する心理的抵抗、もしくは不安が受け手の側にあつてのことではないかと、私は見ております。

ですから、一つの軸で見ると、日本人というのは宗教的にかなりいいかげんなところがあつて、何でもかんでも受け入れてしまう。ところが、別な軸を取って、一神教的か多神教的か、神々の共存を許すか許さないかということについては、かなり敏感に反応して強く抵抗を示すようなことがあるのだと思います。

こういったことが日本人の持っている宗教の特徴であり、そこから出てくる行動及び考え方のパターンなのではないかと考えられます。

余談になりますが、このことが図らずもあらわれてしまう一つの例が、日本の企業が外国に行つて会社をつくる場合だと思えます。例えば、日本の自動車メーカーが欧米に工場をつくつていますが、責任者である日本人は、そこに自分たちの民俗宗教的な行動パターンをつくらうとする。しかし、雇われるのはそれとは違ふ、一神教的な風土に

育った外国の人たちであるために、一神教的文化と民俗宗教的もしくは多神教的文化の違いがさまざまな誤解を生んだり、軋轢を生んだりしているのではないかと思えます。

私自身は宗教について調査をしたといっても、NHKの調査活動の一環として行ったわけですから、ある人を信仰に導くという目的でやったわけではありません。けれども、信仰をどう広めていくかという立場で見ただけの場合には、日本人の持っている宗教とは、生活の全体を包み込んでしまうような大きなシステムとの調和の中に置くという、そういう視野から考える必要があるのではないかと思えます。

要するに、民俗宗教の場合には、聖書のような教典があって成立している種類の宗教ではありませんから、主たる布教の場は、年中行事、通過儀礼ということになります。布教という立場から見ると、年中行事とか通過儀礼の場を通じて、人々との接触を拡大していくことが必要なのではないかと思われます。

かなり駆け足でお話をしてまいりましたが、以上が私のお話の第一の部分になります。日本人の宗教というものを、日本人の素朴な感覚の上に立って考え直す、また、そういう概念をつくり上げていくことの必要性、そういうところに立って物事をもう一回とらえ直してみる必要性について、お話を申し上げたつもりです。

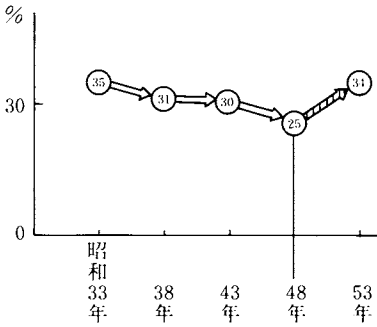
一一

二番目としては、時代の変化ということになります。

昭和五十六年に私たちが宗教意識の調査を行う一つのきっかけになりましたのは、文部省統計数理研究所の「日本人の国民性」という有名な調査の結果でした。この調査の中に、「信仰とか信心を持っている人は三五%ございまして、この調査も五年がございまして、昭和三十三年の時点で何らかの信仰とか信心を持っている人は三五%ございまして、この調査も五年ごとに行われまして、時代が下るにつれて、だんだんと減ってまいりまして、三十八年には三二%になり、四十三年

には三〇%になり、昭和四十八年には二五%まで下がってしまいました。つまり、戦後、日本人はずっと宗教離れを続けていった状況でございました。それが、四十八年を底にして、また、三四%（五十三年）まで戻ってきたのです（図一〇）。もう一つ、NHKの「日本人の意識」という調査を見ましても、昭和四十八年から五十三年にかけて、「神や仏を信じる」という人がふえ、日本人全体が宗教に近づいていくさまが、データの中から読み取れました（図一〇）。これは何かあるのではないかとこのように、新たに「日本人の宗教意識」という一本の調査全体を宗教の問題に費やしてみるとということになりました。

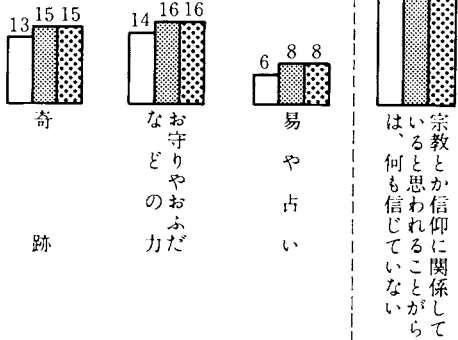
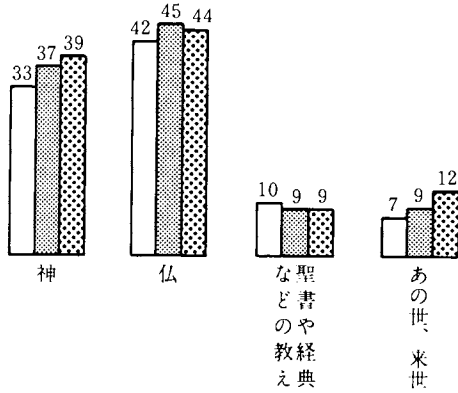
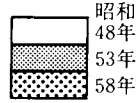
図一〇 <信仰とか信心をもっている人>



文部省統計数理研究所
「日本人の国民性」調査
NHK放送世論調査所編
『図説 戦後世論史(第2版)』
(日本放送出版協会)より

図一11 <信仰・信心>

宗教とか信仰とかに関係すると思われることがらで、あなまたが信じているものがあるですか。もしあれば、リストの中からいくつでもあげてください。(答えはいくつでも)



時代の変化には幾つかの側面があると思います。

一つは、かたい言葉ですが、規範の問題ではないかと考えました。ご存じのように、昭和四十八年は、オイル・ショックのときで、生活にさまざまな影響、変化が生じました。それ以前は「消費は美德」であったものが、突如、再び「儉約は美德」ということに逆戻りをいたしました。そういうふうに関係が激しく変動するときは、人々が宗教

に近づくと言われております。

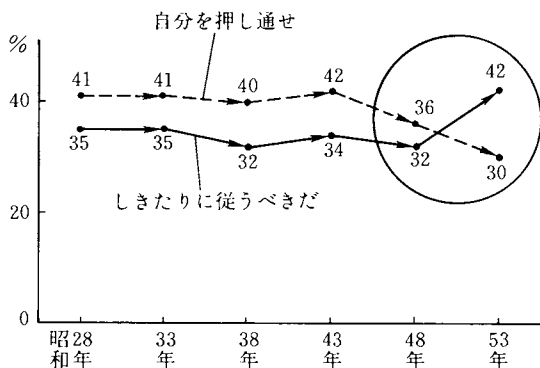
戦前から戦後という価値観の激変を体験された方は、体験的にご存じだと思いますが、きのうまではこういうことであつた。きょうからはこうだという二つの異なる価値観や規範を体験した場合に、そこに葛藤が生じます。というのでしょうか、なぜきのうまでのことは間違ひなのか、根本的に変わらないものは、一体何なのかという疑問が生じてまいります。そういう根本的な規範への関心が、ある部分、この時期の宗教回帰に結びついたのではないかと考えられます。

統数研の調査ですが、例えば、「しきたりに従うべきか、自分を押し通すべきか」ということを尋ねてみますと、昭和四十八年までは自分を押し通すほうが多数派でございました。これが四十八年から五十三年にかけて逆転をしまして、しきたりに従うべきだという人のほうがふえております(図―12)。それ以外にも、古いタイプの道徳が四十八年から五十三年にかけてかなり見直されまして、逆に新しい個人の権利の尊重とか、自由を尊重するといったものの支持が、より少なくなっております(図―13)。こういった規範の変化が一つにはあるのだと思います。

第二点目としては、科学と宗教の関係があると考えられます。先ほど、オイル・ショックと申し上げましたが、それだけでなくて、この時期にもう一つ大きな変化として出てまいりましたのは公害の問題でございます。これを象徴的に扱いますと、公害以前というのは科学に対するバラ色の期待の時代、科学が万能だと見られていた時代であると思います。ところが、そこに公害という問題が出てきまして、必ずしもかつての日本人が見ていたほどバラ色ではないということが明らかになってまいりました。

私どもで行った調査の質問で見まして、「科学は万能ではない」と思う人、昭和五十六年には七三%、四分の三でございます(図―14)。「科学が進歩してもそれが常に人間を幸福にするとは限らない」というのは、やはり四分の三、七六%と、かなり科学に対して冷めた見方をするようになってまいりました(図―15)。

図一12 <しきたりに従うべきか>

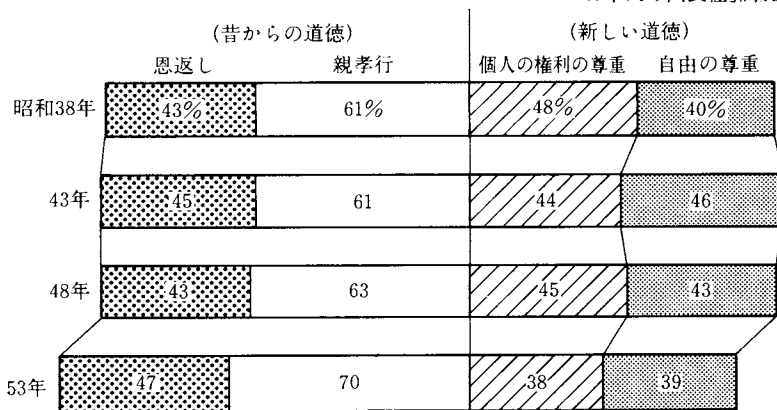


文部省統計数理研究所
「日本人の国民性」調査
前掲『図説 戦後世論史(第2版)』より

図一13 <たいせつな道徳はどれか>

(2つ回答)

文部省統計数理研究所
「日本人の国民性」調査



前掲『図説 戦後世論史(第2版)』より

図-14 <科学について>

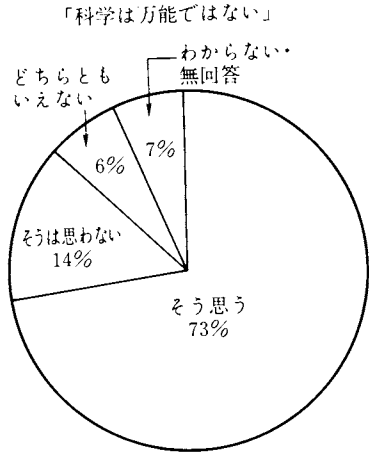
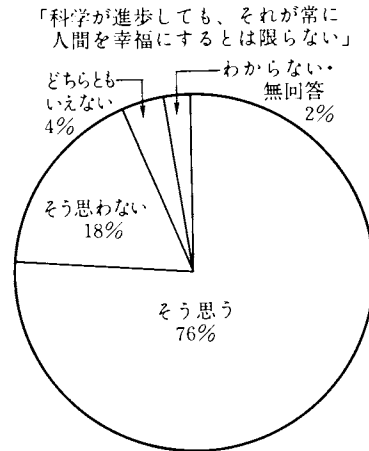


図-15 <科学について>



個人的な体験を申し上げますと、私は、いわゆる「団魂の世代」の一員ですが、私どもの世代は、さまざまな機会に科学的であるということはいいことだと教え込まれた世代だろうと思います。ですから、逆に、宗教のようなものを信じるのは何となく恥ずかしいという感じがあったのですけれども、科学の地位が次第に低下してくるにつれて、逆に宗教に対する抵抗が少なくなっていく、あるいは宗教に対する評価が改まっていくということがあったのではないかと思います。

冷静に考えてみますと、科学は何度も繰り返して起こる事柄についてしかわからない。ただ一回しか起こらないことというのは、科学的に確かめようがないわけですから、科学では扱えない領域が人間の生活の中には非常にたくさんあります。例えば、病気の親を持っているとします。医学が進歩して何年か後にはその病気に対する特効薬ができたり、治療の方法ができたりするのかもしれないけれども、今、病を患っている自分の親に合うかどうかとい

うことになりますと、これは話が全然別であります。つまり、自分の親というただ一回的な存在に対して、そこで科学が間に合うか間に合わないか、役に立つか立たないかというような実存的な状況になりますと、科学の限界が見えてまいります。それに、もともと科学では扱えない種類の問題もある。要するに、科学は万能ではないということがわかってきまして、そこから宗教の復権が起こってきているのだと思います。

ちょっと大きな話になってしまいますが、宗教と科学の対立というのは、必ずしも自明の問題ではないのです。宗教と科学が対立するものとして扱われるようになったのは、どうもキリスト教の出現以後であるらしい。私どもが歴史で習ったことは、大抵キリスト教的な文化の影響を受けていますので、私なども、何となく宗教と科学とを自明の問題として対立的なものだと受けとめていたのですが、いろいろ調べてみますと、そうではなくて、キリスト教以前の古代のギリシアですと、科学と宗教とは立派に共存しております。それから、我が国のような民俗宗教ですと、これも科学と対立することなく宗教が存在することができます。どうも一神教文化圏の人たちも、近年、そういうことに気がつき始めたのではないかという気がいたします。

証拠は二つあります。一つは、イギリスにオープン・ユニバーシティという放送大学がありまして、その講義で、科学と宗教の問題を扱った先生がおります。この人がギリシア時代の例を引いて、科学と宗教の対立は必ずしも本質的なものではない、むしろ人類の長い歴史から見ると、ごく一時期のものと考えたほうがいいと言っております。^{註(4)}

もう一つは、ガリレオ・ガリレイが宗教裁判にかかって、無理やり自分の説を否定させられて、最後に「それでも地球は動く」と言った話の後日譚でございます。これについて、近年、ローマ法王庁がガリレオの名誉を回復するということを言っております。これも、宗教の側から今の科学を否定し切れなかったということがあるのだと思います。必ずしも宗教と科学が対立関係だけでとらえられるものではないと、気がつき始めた一つの兆候だろうと思います。

しかし、それはごくごく最近のことでありまして、一般的なレベルの話としては、やはり科学と宗教は対立するも

のとしてとらえられておりました。ちょうどシンソーのような関係だと思いますが、科学が非常に高い位置にあったときには、宗教はさげすまれていました。あまりその存在理由を認められていなかった、というよりは、むしろ否定されていた、と言ってよいでしょう。それが科学ではいろいろ力の及ばない問題があるのだという認識が出てきたときに、逆にそういうものを取り扱える宗教の地位が高くなってきた。——そういう流れの変化、社会の変化の方向があるのだと思います。

時代の変化の三番目として挙げておきたいのは、一つには日本が大国化した、経済発展をした結果だと思いますが、我々にとって適当なモデルがなくなってしまうたということです。或る時期まで、無意識の前提としてアメリカを先行者として意識してきたわけですが、現在、我々は、いろいろな意味でアメリカとは違った状況にあり、また、違った道を歩き始めております。アメリカの流行が半年たつと、日本に来るということだけではとらえられない、自分たちで何か新しいモデルを探していかなければならない、そういう時代に突入をしてしまいました。そこで、何かそういった時代を生きる指針を示唆するものが必要だと痛感するようになったのではないのでしょうか。

あまりそのことと直接に結びつくような質問ではありませんけれども、昭和五十六年の宗教意識調査で、「生き方の手本となるようなものがないため、多くの人が迷っていると思うか」と尋ねましたところ、半数の人がこれを肯定しております（図―16）。

それから、宗教の調査とは全然関係ありませんが、私もで行ってきた調査の中に、「小学生の生活と意識に関する調査」がございます。これは小学生だけではなくて、その両親にもいろいろ子供の教育に関して尋ねておりますが、今、自分の子供の教育に不安を感じている人たちのかなり多くが、自分自身が子供であったころと今の子供とは、あまりにも環境が違うから、どうしていいかわからないということを挙げています（図―17）。これは、手本となるようなものがないために、多くの人が迷っているという具体的なあらわれ方の一つだろうと思えます。自分の体験し

註(5)

図-16

「生きかたの手本となるようなものがないため、多くの人が迷っている」

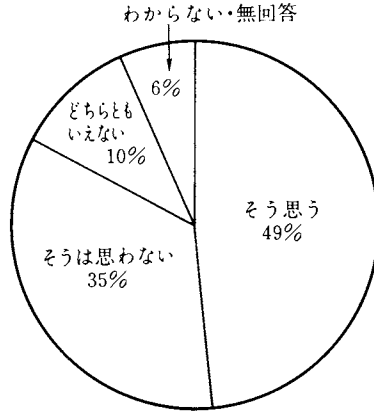
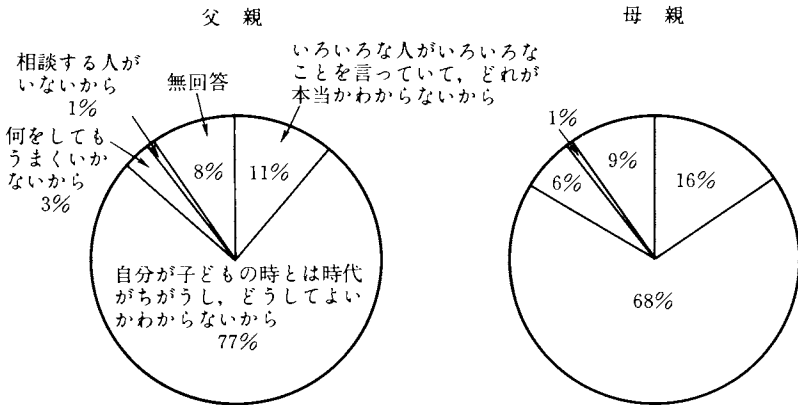


図-17 子どもの教育に不安を感じている理由



たのと同じことを子供に伝えるというのでは、間に合わない状況が生じております。

おもちゃ一つにしても、昔はベーゴマだのメンコだのであったものが、今やファミコンとか何とかなってあります。それから、以前は、外で遊んでいたのが、近年は、外は危ないので部屋の中で遊ぶことが多い等々、それぞれの身の周りにたくさんの実例があるだろうと思います。いずれにしても現在は、従来のやり方を応用していくことが極めて難しいところに立っておりますから、何か示唆を与えるものが欲しいということがあろうかと思えます。

次に触れておきたいのは、個人主義の問題でございます。戦後の日本がやり直しをしていくときに、一つの基本に置いたのは、個人主義だったと思います。個人の中にこそ価値があると考えて出直しをしたわけですが、どうもそれがいろいろな意味で行き詰まっているのではないかという感じがいたします。

言い方を変えますと、個人に意味を認めるというのは、人間を超えるものから個人を切り離すということだろうと思います。ところが、人間を超えるものから切り離された個人はどうなるのかというのが、いろいろな形で明らかになっております。私どももその世代ですが、一九七〇年（昭和四十五年）ごろからでしょうか、生きがいの問題が盛んに言われるようになりました。生きがいというものは非常にしばしば他人との関係、あるいは自分を超えるものとの関係から生じてまいります。それを、私たちは個人主義という原則にのっとって、自分の内部に見い出そうとしてきました。そこから生じた困難が、生きがいブームの背景にあったのではないかと思えます。その後、アメリカでも日本でも「ルーツ」というテレビ番組が大ヒットをいたしました。あれも個人ではなくて、自分を一つの大きな流れの中に置いてみる、切り離された個人ではなくて、自分を超えるもの、人間を超えるものとの関係の中にもう一度位置づけてみるという欲求から出たものではないかと思われまます。

人間を超えるものという言い方をいたしましたけれども、それは、ある場合には社会であったり、家族であったり、また、会社であったりいたします。ところが、会社を見ましても、次第に終身雇用でなくなるといふ状況が出てきて、

会社と自分との関係だけで自分を支えることができずに変化をしてきております。ですから、自分を越えるものとの関係をどうとらえたらいいのか、どう構築するか、建て直していったらいいのかという問題が生じてきております。それらが、早晚、宗教と結びつく、ある宗教的なものへと向かう一つの契機になっているのではないかと思います。

もう一点だけ、時代の変化の方向に関連して申し添えておきたいのは、合理性の問題です。「非合理の復権」と申し上げたらもっといいのかもしれませんが。戦前があまりに集団にウェイトを置き過ぎたために、戦後の日本は個人という土台の上に新たに建て直しをしようとしたしました。それと似たような関係で、戦前はあまりに非合理であったということが言われました。その反動で、戦後は人間の合理性を前提に、あるいはそこを目指して進んでまいりました。ところが、どうも人間はそれほど合理的な面ばかりではないということが明らかになってまいりました。そこで、非合理的なものが見直されてきております。それは世界的にもオカルトブームとかいう形で起こっておりますが、こういった非合理的なもの、あるいは神秘的なものが若者を中心にかなり見直され、受け入れられるようになりました。私としては、従来、合理性として前提されていたものがあまりにも浅薄な合理性だったからではないかと見たいと思います。つまり、非合理的なものの復権が進んでいるからといって、物事すべてが非合理的なのではないかと私は思います。ただ、それにしても初期のコンピュータがあまりにも形式的であったのに対して、もう少し人間的なコンピュータができないかということが研究されておりますけれども、それと同様に、従来のあまりにも浅薄な形式主義的な合理性だけではなくて、もう少し複雑微妙なところまで取り込んだ、あるいは一見非合理的に見えるところまで取り込んだ、新しい高みに立った合理性というものが目指されているのだと思います。

いずれにしても、従来は、いかにも非合理ではないかと受けとめられていたものの中に、新しい意味を見出す必要性が生じているとも思いますし、実際にそういう方向に世の中がやや動いてきているのではないかと。そういうこと

で、大きく見ますと、ここしばらくの間は宗教がやや見直される方向に動いてきていると言つてよろしいかと思ひます。

ただ、これは率直に申し上げるのですが、一つ私もよくわからないところがございます。先ほど時代の変化のところでお話した文部省統計数理研究所の調査で、昭和四十八年以後、五十三年に向けて宗教回帰が進んだ。そこまではよろしいわけです。問題はその後、もし、その先何も変化がないとすれば、さらに宗教回帰は近年進んでいなければならぬのですけれども、そういう感じでもないのです。数字で申し上げたほうがよろしいかもしれませんが、昭和三十三年は三五%の人が信仰心を持っていました。三十八年には三一%になり、四十八年には二五%まで下がってしまいました。五十三年には三四%までいったのですが、この先、実はふえておりません。五十八年には三二%ぐらいで、微減ということになりました。オイル・ショックの後、ずっと宗教回帰が続いているかというところ、そうでもないのです。これが一体どうしてなのか。これから説明をしなければならぬ問題だと思つております。

こういったいくつかの時代的变化が、今も同じように続いているかというところ、いま一つ不確かな要素を持つております。しかし、少なくとも戦後という大きなくりで考えてみますと、宗教に対して最も批判の強かった時期、あるいは厳しかった時期は過ぎたと見ることができるとは思ひません。

ここまでが私の話の第二部になります。

残りの時間で、若者たちについて若干触れておきたいと思ひます。

二二

こういう日本人全体の変化は、もう少し細かく分けてみますと、実は、いろいろ複雑な動きを含んでいます。仮に、年齢の高い人たちだけが宗教に近づくようになったということがあつても、国民全体の中で宗教を信じている人の割

合は変わってまいります。若い人、中年、高年層の人、それから男女と分けてみますと、いろいろな動きがわかってくるわけですが、その中の若者を中心に二、三特徴を拾ってみたいと思います。

一つは、「日本人の意識」という調査の結果ですが、神や仏を信じるという若者がふえているということです。日ごろの実感として感じておられることだと思えますが、横軸に年齢をとって、縦軸に神や仏への信仰心をとってみると、図18のグラフになります。つまり、年齢の高い人ほど信仰や信心を持っている割合が高い。若い人はあまり信仰、信心を持っていない。これはどの調査でも、いつの時代でも大体こういうふうになります。言いかえますと、年齢が高くなるにつれて、信仰や信心を持つようになるものだと言ってよろしいかと思えます。

ところが、近年の変化を見ますと、一番若い人たち、年齢で言いますと十代の後半から二十代ぐらいのところ、信仰や信心を持つ人たちの割合が少し高くなっております。これが一つの特徴と言えるだろうと思えます。

別な選択肢になりますけれども、奇跡を信じる人が、若者でふえております（図19）。それから、易や占いを信じる若者がふえております（図20）。

重要なことは、奇跡を信じる人は、昭和二十八年より前に生まれた世代の人たちは一〇%前後ですと安定をしております。ところが、その後生まれた人たちでは、急にふえまして、三倍ぐらいになっています。このように生まれ年で回答の傾向が決まってしまうものがあります。先ほどの「神や仏を信ずる」というのは、逆に、どの時代に生まれても、一定の年齢になると、神や仏を信じるようになってよろしいと思うのですが、この奇跡を信じるという場合は、昭和二十三年に生まれた人は、五年、十年たったからといってふえたり減ったりする兆候はないのです。どういう時代に生まれて、育って、教育を受けたか、影響を受けたかによって、ほぼその世代の中で、奇跡を信じるという人の割合は決まってしまうわけです。

ですから、昭和二十八年から後の若い人たちについては、オカルトブームが効いているのか、何が効いているのか

図-18 神、仏への信仰・信心(年齢別)

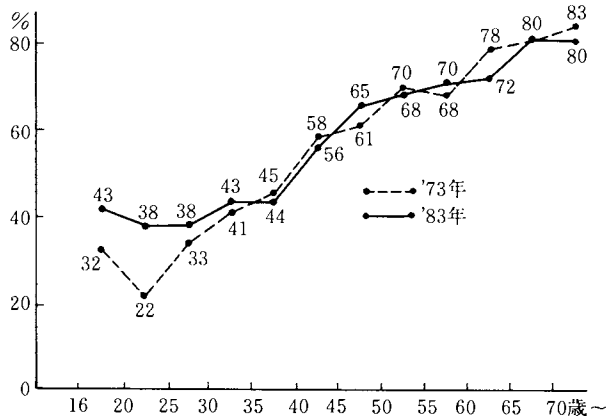


図-19 「奇跡」への信心

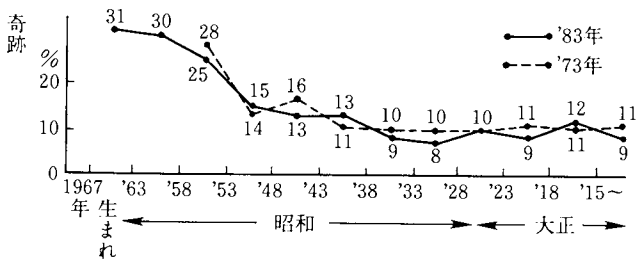
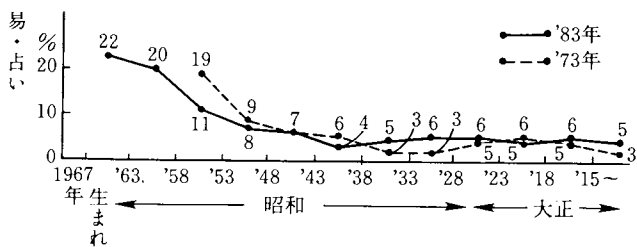


図-20 「易や占い」への信心



わかりませんけれども、奇跡を信じるという方向での人格形成がなされているらしいことがわかります。易や占いに ついてもほぼ同じようなカーブが出ております。

こういう奇跡を信じたり、神、仏を信じるという人がふえている、それから、いわゆる現世利益的行動というの でしょうか、お札をもらったり、お参りに行ったりとすることをする人もふえているのですが、そういうことと宗教心 とが結びつかないのはどうしてかという問題が、最後に残ります。

これは確かな証拠があつて申し上げているのではなくて、一つの解釈なり仮説にすぎないのですけれども、私は二 つの力が打ち消し合っている結果ではないかという感じがしております。一つはさつき二番目の部分で申し上げた科 学万能主義の後退ということ。つまり、それだけではとらえられないものがあるという認識は、若い人たちの間に非 常に強くなっていると思います。そうして、それは若者たちが宗教に近づいていくほうに働いているのだと思います。 それと打ち消し合っているものは何かということですが、私の推測では、どうも世の中のこと全体を何か一つのまと まったシステムでとらえようとする欲求が弱まっているのではないかと思われまます。宗教というのは一つのまとま った世界観を提示するわけです、私の解釈では、マルクス主義のようなものも、そういう一つの世界観を提供するこ とによつて、ある世代の人たちにとっては宗教と同様の機能を果たしていたのだと思うのですが、世の中が非常に専 門化され、細分化され、それぞれのところで独立した発展が進んでいくにつれて、なかなかそれで全体をとらえるこ とは困難になってきております。また、そういう抽象的な全体をまとめるような大命題にかかわり合っていくと、日 常の生活も危うくなるということから、どうもそういうバラバラのものはバラバラのものとして、そのまま受けとめ てしまふという精神的姿勢とでもいうのでしょうか、対処の仕方が始まっているのではないかというような気がいた します。ですから、そういう意味では、そこで宗教の問題は棚上げにしておいて、各部分部分、自分の必要なところ に適応しているということがありはしないかと思っております。

そう考えますと、皆様方もそうでし、私のような調査をやる人間にとってもそうだと思うのですが、最も注目すべきは人間性とは何かということだろうと思います。つまり、時と場所、時代と場所を超えて普遍的な人間性というものがあるはずなのですけれども、若干の反省を込めて申し上げると、我々は体験なり見聞の範囲が狭かったために、この時代、この地域だけの特殊な人間の形を普遍的な人間性というふうに誤解をしていたのではないのでしょうか。つまり、どこまでがおいておいても育つ人間性であるのか、どこから先は我々が今人間性と思っているものを正しいと思ひ、それに価値を見出すならば、人為的に育てていかなければならないものであるのか。その見極めをしなければならぬ時期に来ているように思います。

先ほどいただいた資料（第二十二回中央教研配布資料）の中に、『日蓮聖人の教えから見た医療』という小冊子がございます、そのまえがきの最後のところですが、「病人に対しても生きた救済の理念を深く追求するとともに、その教訓を生かし、現代社会の求めるニーズにこたえることが大切ではないかと思考される。」という文字が並んでおります。そのとおりだと思います。第二部で申し上げたようないろいろな時代の動きがございます。その中に、最初に申し上げた日本的な宗教がございます。世の中が変われば日本的な宗教も、そこに対応してその時代の問題、その時代のいろいろな人々が悩んだり苦しんだりしている問題に取り組まなければならないのですが、残念ながら言うべきだろうと思ひますけれども、先ほど申し上げたような民俗宗教でありますから、そこでは宗教が自動的に新しい問題に対して取り組んでいくという仕組みが含まれていない。それを自分たちの手で新しい時代に見合うように修正をしていかなければならないということだろうと思ひます。

地道な努力を続けておられる方に失礼があつてはなりません、私のような者の目から見ますと、既成の宗教はこういう時代の変化にどれだけついていっているだろうかと疑問に思うことが少なくありません。新しい時代の人間性というのは一体何なのか。今、我々が前提としている人間性というもののどこを守り、どこを変えていけばいいの

かという問題を含めて、新しい時代に見合った宗教の形が検討されていかなければならないと思います。

マスコミの報道を見ておきますと、連続幼女誘拐殺人犯と言われている青年が、いかに恐ろしい人間かということが、あちでもこちでもたくさん書かれたり、言われたりしております。彼が伝えられているとおりの人物であるとして、人間の中にはそういうふうになる可能性も含まれているのです。ほおっておいても全ての人間が真っ当に育つわけではありません。それが非常に重要なところだろうと思います。

ところが、今までは、たまたま時代の変化がそれほど大きくなかったがために、既存の集団、あるいは既成の年中行事とか通過儀礼で形成されている民俗宗教で間に合ってきたわけですけれども、時代の変化が激しくなると、それだけではどうにもいかない。やはり人為的な努力が必要になってくるだろうと思います。

若者が新・新宗教と言われているような新しい小さな宗教に、より多く傾斜していくのは、そういった新・新宗教という小さな教団、あるいは歴史の浅い教団のほうが、過去にとらわれずに時代に対応しているからではないだろうかという気がいたします。そういう意味で、歴史のある教団、大きな教団ほど、今までの財産として大きなものがあるだけに、なかなか新しい時代への対応が難しいのだろうと思えますけれども、こういった変化の目をしつかりととらえながら、新しい時代に対応していく必要があるのだろうと思います。

冒頭にも申し上げましたように、私自身は調査のほうが専門でありますから、それぞれの教団の教義の中身については必ずしも明るいものではないかもしれませんが、例えば、日蓮宗の場合、時、時代というものを的確にとらえるべきだという教えがあるやに伺っております。そういう意味で、その教義に立ち返って、時代というものに対して鋭い感受性を持ってとらえていくことを、さらに力を入れておやりになるとよろしいのではないかと思います。日常的いろいろな場合に、反省をさせられたり、お感じになったりする場がおありかと思えますけれども、それとは別に、若者なら若者相手に集中的な聞き取りをやってみるとか、あるいは宗教という立場からのマーケットリサーチをやって

みるということが、今のようない時代には非常に有力なものではないかと思ひます。私どもの研究所は、立場が立場でございますから、今の日本人がどういふところに向かっているのかというスタンスでしか調査ができませんが、それぞれの教団のお立場からすると、それとは別に、もっと踏み込んだ調査がいろいろできるのではないかと思ひます。そういうことも機会があれば、ぜひおやりになるとよろしいのではないかと思ひます。

以上で私のお話をおしまいにさせていただきます。長時間ありがとうございました。(拍手)

〔註〕

- (1) NHK世論調査部編著『日本人の宗教意識』日本放送出版協会 昭和五十九年
- (2) この調査の結果については、NHK世論調査部編著『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会を参照されたい。
- (3) 宮家準著『生活のなかの宗教』日本放送出版協会 昭和五十五年 七頁
- (4) C・A・ラッセル編 成定他訳『O U 科学史 I 宇宙の秩序』創元社 昭和五十八年
- (5) NHK世論調査部編著『いま、小学生の世界は 続・日本の子供たち』日本放送出版協会 昭和六十年